

今週の為替相場見通し(2022年11月14日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		138.46 ~ 147.55	138.76	136.00 ~ 143.00	
ユーロ	(ドル)		0.9898 ~ 1.0364	1.0347	1.0200 ~ 1.0040	
(1ユーロ=)	(円)		142.65 ~ 147.09	143.68	142.50 ~ 146.50	
英ポンド	(ドル)		1.1291 ~ 1.1855	1.1835	1.1400 ~ 1.1950	
(1英ポンド=)	(円)	*	163.07 ~ 169.09	164.33	160.50 ~ 167.50	
豪ドル	(ドル)		0.6388 ~ 0.6715	0.6707	0.6630 ~ 0.6780	
(1豪ドル=)	(円)	*	92.62 ~ 95.20	93.09	92.60 ~ 94.10	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1)今週の予想レンジ: 136.00 ~ 143.00 円

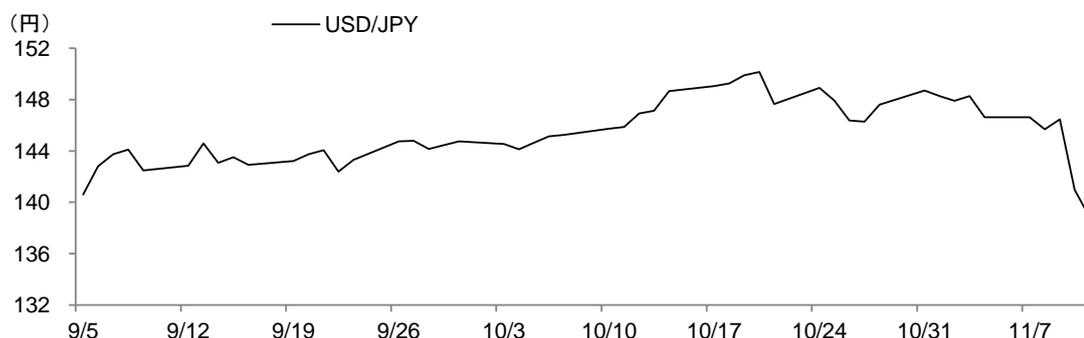
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル円相場は週後半に下落、軟調推移となった。週初7日、146.89円でオープンしたドル/円は、中国当局者がゼロコロナ政策を堅持する旨の発言をしたことを受けドル買い優勢となり、一時週高値となる147.55円まで上昇した。海外時間はリスクオンのドル売りが進み、146円台後半まで下落した。8日、ドル/円は米中間選挙を控え様子見ムードの中146円台後半でのレンジ推移となった。海外時間は米金利低下に追従する形で145円台後半まで下落した。9日、ドル/円は米中間選挙に関するヘッドラインを巡って振れ幅を伴いつつ方向感のない値動きとなり、145円台前半まで下落した。海外時間は米中間選挙における民主党の健闘や軟調な米10年債入札結果を受けた米金利上昇を背景にドル買い優勢となり、146円台前半を回復した。10日、ドル/円は米10月消費者物価指数(CPI)の結果待ちムードとなり、146円台前半でのレンジ推移となった。海外時間に米10月CPIが公表され、総合、コアベースとも市場予想を下回ったことが材料視されると強烈的ドル売り相場となり、140円台前半まで下落。11日、前日の流れを引き継ぎ軟調に推移。米国休日の中発表された米11月ミシガン大学消費者信頼感指数が予想以上に低下し、FRBの利上げペース減速観測が一段と強まったことも相場の重しとなり、一時週安値となる138.46円まで下落、8月以来の安値を付けた。その後、138.76円で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週はドル全面安となった。先々週末からドル売り優勢となる中、米10月CPI下振れ後、更に大幅下落している。今週についても、CPIショックの余波や中国のゼロコロナ政策緩和期待、米国による日本の為替操作国認定の見送りなどを受け、ドル売り地合いを基本線としたい。今週相次ぐFOMCメンバー発言にも注目が集まる。先週のCPIは前年比+7.7%と物価目標である2%には程遠い。その上で、11月会合以降の経済指標の評価及び、金融政策の先行きに対する姿勢に変化が生じるか、発言次第で上下に触れやすいため警戒が必要だ。最も、利上げペース鈍化が織り込まれ始めたとはいえ、基調的な金利差拡大は継続するため、今回のCPIショックだけでドル円の趨勢がドル安・円高局面に移行するとは考え辛く、一方的な下落は考えにくいことから、ドルの押し目買いフローが入りやすいことは念頭に置くべきだろう。今週的主要な経済指標としては、15日(火)に米10月生産者物価指数、米11月NY連銀製造業景気指数、16日(水)に米10月小売売上高、17日(木)に米10月住宅着工件数などが予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/7~11/11)の値動き: 安値 138.46 円 高値 147.55 円 終値 138.76 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 1.0200 ~ 1.0040 142.50 ~ 146.50 円

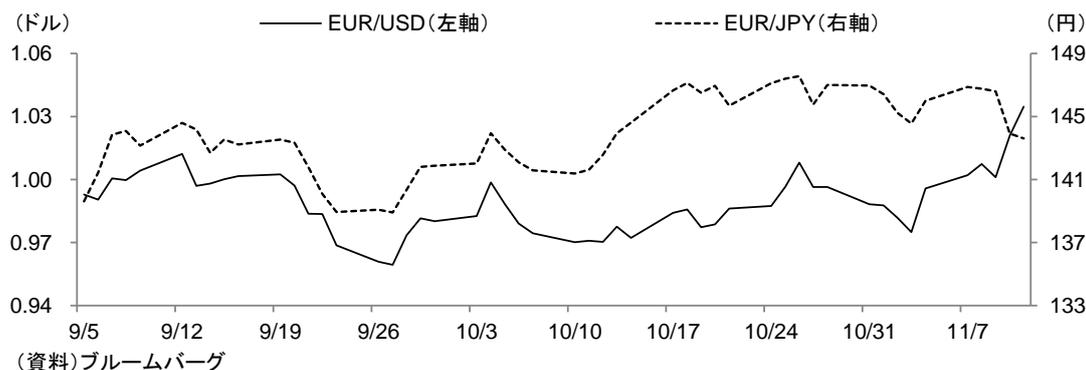
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて上昇する展開となった。週初7日、0.9930でオープンしたユーロ/ドルはリスクオンのドル売りが進んだことでパリティを回復し一時1.0035まで上昇した。8日、ユーロ/ドルはパリティ付近で推移した後、米金利の低下を受けて一時1.0096まで上昇するも米国中間選挙の結果を見極めたいとする様子見ムードから1.01ちょうど抜けとはならず。9日、ウクライナ問題を巡るリスクセンチメントの改善からユーロ/ドルは上昇する場面がみられたものの、その後米金利が上昇に転じたことでドル買い優勢となり、一時パリティ割れまで下落した。10日、米10月消費者物価指数(CPI)の発表を控えじりじりとドル売りが進行し、ユーロ/ドルは一時週安値0.9936まで下落するも、米10月CPIの結果が総合、コアベースともに市場予想を下回ったことで米金利が低下し強烈なドル売りとなると、ユーロ/ドルは8月以来となる1.02台に乗せ1.0222まで急伸した。11日も前日のドル売りの流れは緩まず、ユーロ/ドルは1.03台に乗せ約3か月ぶり高値を更新した。NY時間、ベテランズデーにつき米債券市場が休場となるも、この日発表された米シガン大消費者マインドは市場予想比低下しドル売りの流れは継続した。1.03台半ばまで上値を切り上げ越週した。

今週のユーロ相場は堅調推移を予想している。先週の米10月CPIの結果を受けてFRBの利上げペースが鈍化する憶測が一段と強まる反面、ECB当局者からは依然タカ派発言が相次いでおり(ナーゲル独連銀総裁「景気に影響を与えてもECBの金融政策正常化推進を支持」、ラガルドECB総裁「インフレがあまりにも高すぎ、2%に戻さなければならぬ」、シュナーベルECB連銀理事「金融政策を停止させる時間はない」、デギントスECB副総裁「QTは遅かれ早かれ2023年には確実に実施される」等)、足元米国を上回るインフレ鎮静化を最優先する方向性が確認され、米欧金融政策のスタンス乖離が意識される形となった。ウクライナ情勢を巡っても、ロシア軍が侵攻開始の2月から支配下に置いてきたヘルソン州州都から部隊を撤退させ地政学的リスク懸念がやや後退したことも心理的サポートとなり、今週もユーロは堅調推移がメインシナリオとなる。もっとも、先週欧州委員会が発行した最新の経済予測でユーロ圏の成長率見通しが前回から大幅下方修正(前回1.4%→今回0.3%)されたこと等利上げに猛進する過程でのスタグフレーションリスクも一層警戒され、3か月ぶり高水準に利益確定の売りが強まることも予測され、経済指標を眺めつつ高値圏では神経質な展開も想定しておきたい。今週主な経済指標として、15日(火)独11月ZEW景気期待指数、ユーロ圏7~9月期GDP(改定値)、17日(木)ユーロ圏10月CPI(確報値)等が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/7~11/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.9898 高値 1.0364 終値 1.0347
(対円) 安値 142.65 高値 147.09 終値 143.68



3. 英ポンド

欧州資金部 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 1.1400 ~ 1.1950 160.50 ~ 167.50 円

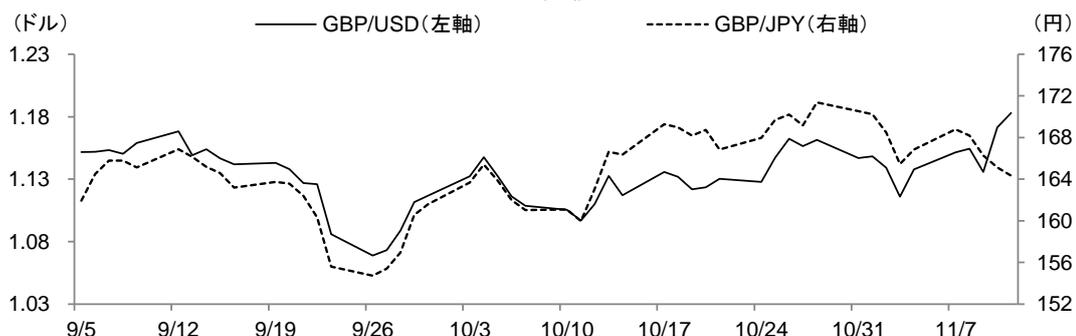
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルで上昇した一方、対円では週後半に下落する展開となった。週初7日、中国当局者によるゼロコロナ政策を堅持する発言を背景にドル買い強まり、一時週安値となる1.12910まで下落するも、前週末から続く中国経済再開期待が漂う中でリスクオンのドル売りの流れが止まず、1.15台前半まで反発した。対円でも165円台後半から169円近辺まで上昇した。8日、株高金利低下とリスクオンの様相が続く中、英ポンドも1.15台後半で底堅く推移した。9日、注目された米中間選挙は共和党が下院をリードするも予想以上に民主党が健闘し接戦となった他、米仮想通貨業者破綻懸念を材料にビットコインが急落するなど、米株が軟調推移となる中でドル買いが進み、英ポンドは対ドルで1.13台半ばまで下落した。対円では166円台前半まで下落した。10日、米10月消費者物価指数(CPI)が前年比、前月比ともに市場予想を下回り、米利上げペースの減速期待が高まる内容に為替は総じて強烈的なドル売りで反応した。米金利は大きく低下、米株主要三指数は大きく上昇、市場全体でリスクオン全快の様相にドル安が止まらず、英ポンドは対ドルで1.17台まで急騰した。一方、ドル/円が5円以上急落したこともあり、対円では下落する展開となった。11日、前日からのリスクオンの流れが続く中で全般的なドル売り地合いが継続、英ポンドは対ドルで週高値となる1.1855高値を付けた後、そのまま高値圏でクローズ。対円では、ドル/円が一段と下落したこともあり163円台まで下落した後、164円台で越週した。

今週の英ポンド相場は、引き続きドル主導での相場展開となる中で軟調推移を予想している。先週は、市場予想比弱い内容となった米10月CPIを強く材料視し、米国における物価上昇が既にピークアウトしたことを確認したかのような猛烈な動きとなったが、さすがにスピード違反。長らく続くドル高相場に調整が入ることは不思議ではないが、月初から既にリスクオンのドル売りで調整が進んでいたところに一段とドル売りが加速し、ドルインデックスは週足ベースで今年最大の値幅を伴って下落する格好となり、短期的なポジション調整は十分進んだ印象。単一の経済指標で米物価上昇のピークアウト決定付けるの時期尚早であり、先日のFOMC後の利上げ局面の長期化を示唆するパウエルFRB議長の発言から考えても利上げスタンスがそう簡単に軟化するとは考えづらく、このままドル安地合いが継続する展開は考えづらい。英国では、17日(木)に延期されていたスナク英国新首相による中期財政計画が発表される見通し。英金融市場を混乱に落とした450億ポンド規模の減税策は再考されることとなろうが、600億ポンドのエネルギー高騰対策が継続される中、400億ポンドの予算不足を全て補うのは困難と見られている状況。英金融市場は債券株為替ともに既に成長計画発表前の水準に戻していることを考えると、新財政計画を材料に英ポンドが一段と上昇する展開は考えづらい。引き続きドル相場主導の展開が続く中、行き過ぎた米物価上昇ピークアウト期待の後退を背景としたドル安地合いの巻き戻しをメインテーマに、個別材料である英中期財政計画も英ポンド上昇の火付け役とはならず、今週の英ポンドは上値重く軟調推移する展開を予想している。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/7~11/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.1291 高値 1.1855 終値 1.1835
(対円) 安値 163.07 高値 169.09 終値 164.33



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6630 ~ 0.6780 92.60 ~ 94.10 円

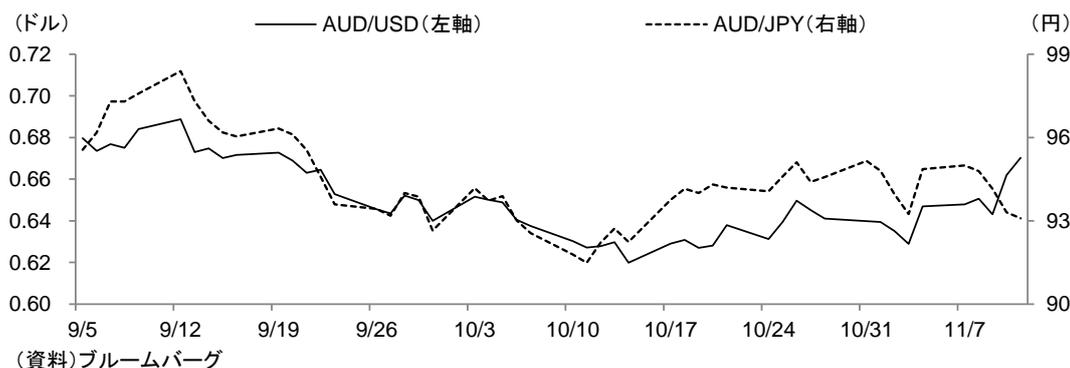
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.63台後半まで下落後、0.67台まで上昇した。7日、週末に中国衛生当局者がゼロコロナ政策堅持の表明を行なったことを受けて、リスクセンチメントが悪化した。豪ドルはギャップオープン後、売りが優勢となり0.64近辺まで下落。その後も軟調な中国経済指標の発表などを背景に、アジア時間内は0.64台前半でもみ合い。欧米時間にかけて株価が上げ幅を拡大する中、豪ドルはじり高となり0.64台後半まで上昇。8日、豪11月ウエストパック消費者信頼感指数は前月から6.9%下落し、2020年4月以来の低水準を記録。約40%がクリスマス商戦での支出を昨年より抑えたと回答し、利上げとインフレの影響が表れ始めた格好となった。又、ニュージーランド2年期待インフレ率は3.62%と1991年2月以来の高水準となり、RBNZによる継続的な利上げを正当化する内容となった。ただし、いずれも相場への影響は限定的であった。欧米時間に入り、米中間選挙の結果に注目が集まる中、米金利が中・長期年限を中心に大きく低下すると、豪ドルは一時0.65台半ばまで上昇した。9日、米中間選挙の結果と米10月消費者物価指数(CPI)発表を待つ中、アジア時間内では特段の材料無く0.65を挟みもみ合い。NY市場時間に入り、仮想通貨交換業者の買収にかかる報道をきっかけに米株が下落すると、豪ドルは売りが優勢となり0.64台前半まで下落。10日、豪ドルは米10月CPIへの警戒から、アジア時間からじりじりと値を切り下げ、一時0.6387まで下落。ブロックRBA副総裁による議会証言では「利上げを中断できる段階に近づいている可能性がある」との見方を示し注目を集めた。豪金利は短期ゾーンを中心に低下し、市場が織り込む12月RBA会合での25bp利上げ確率が若干低下した。米10月CPIが総合・コアともに予想を下回ると、FRBの利上げペース減速が意識され、市場は株・債券高、米ドル安の展開に。豪ドルは0.66台前半まで大きく上昇した。12日、前日の米10月CPIの結果を受けて米ドル安の流れが継続。仮想通貨交換業者による米連邦破産法11条に基づく会社更生手続き申請の発表で市場はやや神経質になる局面もあったが、中国保健当局がコロナ規制を一部緩和(隔離機関の短縮)との報道なども背景にリスク選好度の高まりは衰えず、株高・ドル安に。豪ドルは0.67台に乗せて越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い値動きを予想する。先週は米10月CPIで物価上昇の伸びが鈍化したことから米利上げペース減速の観測が広がり、株高・ドル安が進行。中国のコロナ政策緩和の報道も相まってリスク選好が高まり、豪ドルは0.67台まで押し上げられた。利上げ効果の実体経済へのタイムラグを理由にRBAは10月以降利上げ幅を25bpに縮小しているが、豪7~9月期CPIは前年比+7.3%と32年ぶりの高水準を記録し利上げ加速が意識される結果となった。今週は15日(火)RBA議事要旨、16日(水)豪7~9月期賃金指数、17日(木)豪10月雇用統計などが予定されているが、特に豪7~9月期賃金指数は12月RBA会合における利上げ幅を占う上で重要となる。金融市場では値動きが荒い環境が継続しており、先週の豪ドルは一週間で300pip以上変動した。引き続きヘッドラインとともに急激なリスク選好の変化に注意を払いたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/7~11/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.6388 高値 0.6715 終値 0.6707
(対円) 安値 92.62 高値 95.20 終値 93.09



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。